

2014年8月28日

文化審議会著作権分科会著作物等の適切な保護と利用・流通に関する小委員会（第3回）

ロッカー型クラウドサービスについての意見

----あらゆる消費者が新しい技術の恩恵を享受できるように----

主婦連合会

事務局長 河村真紀子

消費者とはつまり、生活を営んでいる「生身の人間」である。組織の後ろ盾のない（状態にある）ひとりひとりの個人のことである。消費者は生きていくために、また、健康で文化的な生活を維持するために、物やサービスを買ひ、利用する。主婦連合会は、そのような消費者の権利を守るために活動しています。

私的複製の「方法」が、時代と共に、技術の進歩と共に変化していくとき、ルールもまたその進歩に沿って、時代に合った複製の方法を容認していかなければ、今、この社会を生きている消費者が、技術の進歩の恩恵を受けることができない。従って大前提として、ロッカー型クラウドサービスは、共有機能を有しない限り、消費者が正当に入手したコンテンツの私的複製物として、それを「保管」し、自由に「引き出す」ことができるロッカーとして安心して使えるということが担保されることを求めます。

どんな人でも新しい技術の恩恵を受けられることが大切

たとえば、高齢化社会を迎えて・・・

家族が独立してコンパクトな住居に引越しをする

身体の衰えから、介護ケア付きの住居や施設に移る

そのとき、自分がこれまでの人生で正当に取得し大事にしてきたコンテンツ----書籍、音楽、映像など----を、クラウドで保管し自由に視聴再生できる仕組みがあったらどんなに人々の老後の生活に光を当てることでしょうか。「物」としてはかさばり、重く、所有し続けることは困難ですが、データにすれば、自分の大事な宝物のようなコンテンツを持ち続けることができます。

消費者＝利用者目線で、どんなふうに魅力的なサービスが可能になるか、それを最優先に考えると、ビジネスは自ずと後からついてくるのではないのでしょうか。どんなメディアでも変換してくれるサービス、自室の棚に向かうように、コンテンツを楽しみやすくする魅力的なインターフェイスなど。認めるべき自由は認め、フェアなルール設定をする。その原則が何よりも大切と考えます。近視眼的に、利益を生む部分だけは認め、そうでないものは消費者の権利を度外して「自由を認めない」ということであれば、消費者はますますコンテンツから、黙って離れていくでしょう。

今まで取得したコンテンツが無駄にならず、より便利に楽しめる世界が開けたとき、年齢を問わず、消費者は新しいコンテンツをそのコレクションに増やしていきたいという気持ちが芽生えるのではないのでしょうか。

以上